

＊ ＊ ◎ ＊ ＊


「ふるさと文学情景作品」 コンクール入選作品集

— 第36回全国高等学校総合文化祭プレイベント —



主催

富山県教育委員会
富山県中学校文化連盟
富山県高等学校文化連盟

 創造の舞台 ～美しき越の国～
全国高総文祭とやま2012
ふるさと文学を通して観る情景作品募集事業

平成23年1月発行

「ふるさと文学情景作品」コンクール入選作品集

編集・発行／富山県教育委員会生涯学習・文化財室
全国高等学校総合文化祭推進班

〒930-8501 富山市新総曲輪1-7

TEL 076-444-8908 FAX 076-444-4434

ホームページ <http://www.soubun2012.tym.ed.jp>

発刊に寄せて

富山県知事 石井隆一

富山県には、古くは大伴家持が越中で詠んだ二百二十三首の歌をはじめ、時代を超えて数多くの文学作品があります。近年では、角川源義、堀田善衛、源氏鶏太、木崎さと子など多くの優れた作家を輩出するとともに、宮本輝の「螢川」、新田次郎の「劔岳 点の記」、吉村昭の「高熱隧道」など富山を舞台とした優れた文学作品も数多くあります。

ふるさと文学は、富山の魅力や先人の知恵を知り、郷土への誇りを持つことで、大きく変化する時代を生きるための心のよりどころとなるものです。このため、県では、ふるさと文学を世代を超えて継承していく拠点として、平成二十四年夏ごろの開館をめざし、「富山県ふるさと文学館(仮称)」の整備を進めているところです。

このコンクールでは、これからの富山県を担う若い皆さんが、富山の自然、歴史、文化、人々の生活を描いたふるさと文学に、ふれ、感じた情景や心情を表現してくれました。この冊子をきっかけとして、富山県人としての誇りや郷土への愛着がますます深まることを期待しています。



石井知事と各部門金賞受賞者

富山県教育委員会 教育長 東野 宗朗

四季折々の美しく豊かな富山の自然や風土の中で生まれた文学作品を通じて、郷土の先人の心や優れた知恵に、ふれる機会とする「ふるさと文学情景作品」コンクールには、中学生・高校生から一〇二八名の文芸や美術、写真の応募がありました。

このコンクールは、平成二十四年八月に富山県で開催される「第36回全国高等学校総合文化祭」のイベントとして位置付けています。この大会を契機に、富山の高校生の皆さんがふるさとへの誇りを一層高め、全国の方々に富山の文化を発信することを期待しています。

この冊子には皆さんの仲間たちのふるさと文学への感動をもとに、新たな創作に取り組んだ作品をまとめました。いずれも若者らしい感性にあふれています。どうか、仲間の作品に、ふれてください。

皆さんが今後ともふるさと富山の本に親しみ、読書活動を深め、自分とふるさと、そしてこれからの人生について考えるきっかけとして、いただくことを心から願っています。

入選作品集の利用にあたって

- 入選作品の原作紹介のために、初出の作品に読書案内のコラムがあります。
- 文芸部門については、冊子の構成上、ジャンルごとにまとめて掲載しました。
- 美術部門・写真部門は入選順に掲載しました。
- 入選作品集は、「全国高総文祭とやま2012」のホームページからダウンロードすることができます。

文芸部門

金賞

『キトキトの魚』を読んで

魚津高校一年 上浦 眸

ひとりっ子の代名詞といえは、「自意識過剰なガキ」または、「しこたま手のかかるわがまま者」。幼少期は、その代名詞通りの自意識過剰でおませだった室井滋の現在に至るまでの生き方を描いたのが、このエッセイキトキトの魚である。

私は読みながら何度か笑ってしまいました。私自身も「ひとりっ子」。そのため共感する所が幾つかあったからだ。それに加え、著者が歩んできた人生があまりにも赤裸々におもしろおかしく書かれていたからである。私は、故郷富山を土台に、作者と愉快な仲間達が繰り出す爽快感あふれるエッセイに読み入ってしまった。

私は、このエッセイを通して、今まで考えてもみなかった新しい世界を見出だしたように思う。それは、おそらく作品の主題として描かれた「キトキト」である。「キトキト」とは、言わずと知れた富山の方言で、普段とても地味なのが、この上なくイキイキとしている様子、地味なものが健気に頑張っているカンジという意味である。著者の生まれ育った富山には、渋谷109や原宿の竹下通り、東京デイズニースランドのような所は一つもない。辺り一面田んぼが並び、昔ながらの商店街が立ち並ぶ。要は田舎なのである。正直いって、私は富山があまり好きではなかった。なぜなら、前述のように、近隣に遊べる施設が何もないからである。しかし、エッセイの中で著者は、生まれ育った富山という土地で、支えてくれている人と共に健気に生きていくのではないかと。何もない富山で過ごすのは、この上なくつまらないことだ、と思っていた私の考えを大きく覆したのだ。そして同時に、考え方さえ変えれば、この富山でも、おもしろく楽しく生きることができるといって考えが浮かんだ。

この作品で印象に残った場面がある。それは、「仏壇」の話である。著者が生まれ育った家が今でもある。そこにはもう誰も住んではいないが、年に何

度か帰って過ごしているという。そんな著者が、ある日知人に家を貸すのだが、どうも仏壇が気になってしまい、そこから物語が進んでいくという具合である。私が印象に残ったというのは、家が二つもあって大金持ちなんだなあとということではない。著者が自分の家を残しているという点である。東京へ行くことも、故郷のことを大切に思い、仏壇を気にしているという所から、先祖のことを本当に大切にしているのだと思った。最近の家族の事情は、核家族が増えていて、三代ともたない家が多い。そういう中、著者の家は十代と続く古い家であり、先祖を敬う気持ちがよりいっそう強いのだということを実感した。家族とのつながりの大切さをひしひしと感じた場面である。

女優が書いたエッセイということで、私は、著者が自分の生活を自慢している作品だと思っていた。しかし、読んでみると、自分の考えの愚かさに腹が立った。書いてあったのは地元富山の温かい人々の暮らしぶりであった。おもしろおかしく書いてある中でも、著者の地元を大切に思う心、仲間や支えてくれている人々の深い愛情を読み取ることができる。

何もないとばかり思っていた著者の故郷であり、私の故郷でもある富山がこんなにも素晴らしい土地であったということに私は驚いた。そして、大事なものは「モノ」ではなく、「心」なのだということを知った。著者が楽しく生きてきた背景には、著者を支える多くの人の協力があつたことを知った。この作品は私に、人は一人では生きていけないということを教えてくれた。

エッセイで読みやすい作品であるが、その中には人と人とのつながり、故郷の富山の素晴らしさを教えてくれた。私も著者・室井滋さんのように、富山に誇りを持ち、仲間を大切に生きていきたい。

この本



キトキトの魚

室井

滋 著 文藝春秋

とやま弁の「キトキトの魚」のように元気で、健気で、自信過剰な一人っ子だった少女時代。事件を呼ぶ女と呼ばれた青春時代。女優として大活躍する今も、ふるさと富山に寄せる思いが共感を呼ぶ、面白くも切ないエッセイです。

『劔岳(点の記)』を読んで

魚津高校一年 大川 和晃

「雪を背負って登り、雪を背負って帰れ。」この言葉が、この本を読み終えた後、しばらく頭の中でずっと響いていた。

この話は、前人未踏といわれ、決して登ってはいけない山と恐れられていた劔岳山頂に、三角点埋設の至上命令を受けた、測量官、柴崎芳太郎とその一行が山頂を目指して進んでゆく、というストーリーだ。その間、天候、地元の人々との軋轢、機材の運搬など、あらゆる障害が二行を襲うのである。

この話は映画にもなっており、地元富山が舞台になっているということで、大きく宣伝され、名前だけは知っていた。が、それほど興味は持っていなかった。たまたま祖母が、この本を購入し、家にずっと置いてあったのだ。それを何気なく手にとって読んでいたら、いつのまにか通読してしまった。

測量隊というのは、お互いにお互いを信頼しあわなければ成り立たない仕事である。その辺りを、柴崎はよく心得ていて、隊員に対してきめ細やかな配慮をする。柴崎が長次郎に、自分のお金で毛糸のシャツを買って差し出す場面がある。それは、ザラ峠で長次郎に死ぬような思いをさせた事への謝罪の意味であるが、私はこの場面がとても印象的だった。また逆に、長次郎が柴崎の健康を気にして、わざわざ取り寄せた鶏卵を柴崎にすすめるのだが、柴崎は自分ひとりでは食べないのである。そこに居る者全員に分け与えるか、味噌汁の中に割って入れるのだ。

測量隊の仕事は、一歩間違えば一般の人のそれとは違うのかもしれない。が、私は柴崎という人は、きっと他の仕事をしていても、同じなのかもしれないと思った。この人は、分かっているのだと思う。どんな仕事でも、自分だけではできない、という事を。

私は今まで自分が頑張ったからこの結果なのだと思っていた。例えば、勉強やスポーツなど、自分の努力の結果だけが、結果として現れると。

しかし、きっとそうではないのだ。見えない所で、学校では先生や先輩や友達が、家庭では両親であったり兄弟が、自分を支えていてくれているのだ。

『ダモイ遙かに』を読んで

魚津高校一年 高倉 周一郎

「偏頗で矯激な思想に迷ってはならぬ。どこまでも真面目な人道に基づく自由、博愛、幸福、正義の道を進んで呉れ。」

これは、病に倒れやせ細り、満足な治療も受けられず激痛の中書かれたであろう肉親への遺言でありながら、日本人、いや人類すべてへの遺言だといっておかしくないだろう。

私は、この作品を読んだ後に、命について生きることについて、戦争について考えずにはいられないと感じた。生きるとはいったい何なのか。それは、面子を守ることでも体裁を整えることでも、欲の張り合いでも権力の奪い合いでもない。愛という糸を紡ぎ、その糸を未来へと切れることのないように繋げていくことだ。この答えは、山本さんの人生の答えそのものだと思う。

過酷な収容所生活で、次々と仲間が命を落とし、生き残った人達も希望を失っていく。その中で山本さんはロシア兵との通訳をこなし、句会を開き、新聞を発行して、ともすればくじけそうになる仲間の心を支えた。

山本さんは、誰よりもダモイを強く信じていた。どれだけ苦しい状況でも、あきらめない姿勢に強く胸打たれた。山本さんの生きた時代、場所に比べ、現代の私達が過ごしている生活はどうだろうか。自由にペンを握り自分の気持ちと紙に表現できる。また、食事も毎朝、毎晩摂ることができると、何より家族と会いたくなくても、会えてしまふ。何て幸せなのだろうと、この作品を読んで改めて思った。そして、今まで戦争の背景をすべて分かっていたように錯覚していた自分に腹が立った。山本さんとその仲間のダモイへの生き様は、戦争を体験した人、していない人、双方に多くの反省をもたらしただろうに思う。

この作品の中で、とても印象に残った場面がある。ダモイを果たせなかつた山本さんの信念を守ろうと、仲間達が彼の遺書を家族の元に届けることを決意した場面だ。検査を逃れる為に、遺書は、「記憶」という方法で運ばれることになる。見つかったら命の保障はないというのに、彼らは命がけで四通の遺書を何度も書き写し、暗記を繰り返し、頭と心に刻みつけたのだ。ここ

柴崎はそういう事を無意識に感じ、それを優しさという形で返すことができる人なのだ。

話の途中で柴崎と長次郎が、劔岳頂上への道を聞くために祈るシーンが出てくる。すると、「雪を背負って登り、雪を背負って帰れ。」という声が、洞窟の中に響くのだ。長次郎は驚いて「神様のお告げです。」と言うのだ。柴崎は、それを自己催眠にかかり、長次郎自身がそのままその言葉を発したと考えた。それはともかくとして、これを「劔岳に登山するには徹頭徹尾大雪渓に執着せよ。」という意味に解釈して、それが登山路を解く鍵になったのだ。

私は効率のいい勉強法、あるいはスポーツトレーニングを考える。しかし、考えるだけ考えて結局は何もしないのである。そして、しいには、「なぜ勉強をするのか?」という方向に逃げるのだ。が、行者は言うのである。「雪を背負って登り、雪を背負って帰れ。」と。

私には、今はっきりとした夢などはない。だから、やる気もでない。が、行者は言うのである。とりあえず、目の前にあることをせよ。と。今、与えられ、求められているものを、しっかり背負いなさい。と。そうすれば、長次郎のように内なる声がかきと聞こえてくるはずなのだ。「雪を背負って登り、雪を背負って帰れ。」と。

この本



劔岳(点の記)
新田 次郎 著 文春文庫刊
日本地図を完成させるため、不可能と言われた初登頂と山岳測量に取り組んだ主人公らの不屈の努力、山を愛する人々の友情を描きます。山頂で発見された千年前の錫杖が解けない謎として心に残る名作です。映画化されました。

に、彼らを動かした山本さんの信念の深さを感じた。

もしも私が、ここで収容所生活を送っていたならば、他人のことを考える余裕はなかつたはずだ。また、殺されてもおかしくないのに、ロシアの将校に口論できるはずがない。多分食べ物欲しさに、違反を犯している者を訴えていることだろう。本当にひどい状況でありながら、誰よりも前向きに生きた山本さんの二つの言葉には、とても驚かされた。「ぼくだっていつそ死のうと思つたことが何度だつてありました。だけど死んだらもう終わりなんだ。人間、死ぬ気になればなんだつてできる。生きているからこそ、楽しいことだつて見つけ出せると思つたんですよ。」という言葉は、誰もが言える言葉ではないと思う。そしてこの言葉を全ての人に知って欲しいと思つた。

歴史に埋もれたシベリア抑留の事実の渾身の書き下ろし小説を読んで、戦争というものがいろんな形で大きな犠牲を生む産物であり、何物にも代えがたい代償であることを痛切に感じた。今、生きたくても生きられない人がいる現実を考えずに生きている私が、生きている気になってはだめだと思つた。人間として生きていること、命として息をしていることは、これ以上ないすばらしいことなんだと、心の底から気づくことが出来て良かった。

この作品を通じて、私は、山本さんが後世に伝えたかったことをしっかりと受け取れた気がした。毎年戦争の犠牲者でもある家族の人も少なくなりつつあるが、今日の日本が多くくの尊い犠牲者のうえにあることを肝に銘じ、世界平和を願ひ続けていきたいと思つた。

この本



ダモイ遙かに
辺見 じゅん 著 メディアパル
シベリアの収容所に抑留され、零下数十度に及ぶ過酷な環境のもとで、強制労働させられた七十余の旧日本軍兵士達。多くの人々が次々に亡くなる中で、生きる希望、言葉を伝える希望を支え合い、助け合った仲間たちの物語です。

『納棺夫日記』を読んで

魚津高校二年 寺西 恵里佳

この本の著者・青木新門さんは、富山で詩を書き、パブ喫茶を経営していた。しかし、間もなく倒産してしまい、生活のため葬儀社に就職して湯灌・納棺を担当する「納棺夫」になった。

著者は、納棺という特異な作業に携わる自分自身の心を鎮めるため、死や死体や死者との心の葛藤を記録するようになった。それが、この日記である。自分自身のことを「納棺夫」と呼び、人の死に絶えず接する仕事を選んだ著者は、周りから卑賤な仕事と蔑まれながら、「死」について、人一倍敏感に深く考えるようになっていく。その心模様を、時には詩人のように、時には哲学者のように著者は語っている。そして宗教的・哲学的な話の合間に、富山の四季折々の美しい風景がさりげなく描かれ、読む人の心を癒してくれている。

私は二年前に家族と一緒に富山の映画館で「おくりびと」を観た。その映画の原作だから、という単純な動機でこの「納棺夫日記」を手にした。読み進めるうちに、私は寝転がって読むことができなくなり、何か神聖な気持ちになっていった。

この作品の中で、印象に残った著者の言葉がある。「毎日毎日、死者ばかり見ていると死者は静かで美しく見えてくる。それに反して死を恐れ、恐る恐る覗き込む生者たちの醜悪さばかり気になるようになってきた。」この言葉から、筆者がプライドを持って「納棺夫」として死者と正面から向き合っていたことがうかがえる。そんな著者も、初めは「死は汚らわしい」とし、「死」に絶えず触れ合う自分も「汚らわしい存在」と思っていた。「今日も疲れた」「そして今日も疲れた」と、書き綴られる日記のなかに、著者の苦悩と葛藤を読み取ることもできる。しかし、かつての恋人が納棺に取り組み自分を丸ごと認めてくれるの汗を拭ってくれたとき著者の心が救われた。そして、仕事を続けていく中で、仕事に意義を見出し、さらに死体を美しいもの、敬意を払うものだという心が生まれ、それが態度にあふれ、行動となっていたのである。

私には、第三章「ひかりといのち」が一番今後の人生の指針となる内容だっ

文芸部門・散文 銅賞

『ほしのふるまち』を読んで

おはよう、バイバイ。また明日

富山北部高校三年 宮坂 星夏

山は、他県に背中を向けている。

それはまるで、守り神みたいに、ぼつりとひとつ、この県を囲っていた。

雪の中で、暮らしていた。白く輝くばかりでない、灰色の汚れた雪も、歩くことが嫌になるような凍った道も、山の囲いの中で、共に暮らしていた。まるで所有物のごとく。

今は夏で、いくら冬が寒くとも、ここにいる限り夏は暑い。ただほんの少し、吹く風はじわりと秋の匂いがする、気がした。

テレビは、民放が三社。全国ニュースに富山の名前が出るなんて事滅多にない。学力テストでは、上位三位に入る。しかし二位ではない。この前知った、地上デジタル放送普及率は今のところ全国一位だ。けれど、薄い。

山が県を囲っているのだ。地震からも台風からも守ってくれる山は、果ては私達を、他県から守っている。新幹線が通るのだから、まだ速い先だ。

けれど、だったら田舎かと問われれば、そうでもない。それは確かに田舎ではあるけれど、特集されるほどの田舎ではない。とってつけたようなミッドタウン。最近コンビニが増えて来た。ありがたいと思った。

しかし、たかだかそれをニュースで取り上げる富山県の民放には戦慄させられた。コンビニだ。それは、いくら県内初進出といえど、便利で都合のいいコンビニエンスストアがひとつ増えただけだ。

ああそれは、あまりにも、平和。変な行動をとる輩はいても、それだって新聞の向こう側の出来事で、私は生まれてこの方、詐欺にあったことも、変質者にあつたことも、万引きをしたこともない。そもそも、夜に出歩くような都会じゃない。海は広く、魚も水も美味しいけれど、山だつてそびえているけれど、でもそれだけで、それっきり。舞台になるようなものは、山とダム。汚れた河川と、広い海。樹の根っこが沈んでいるとか、海がゆらめいているとかに、私の心はちっとも揺れない。

た。私は今まで宗教に関する書物など読んだことがなかったが、親鸞の思想に初めて触れ、何度も読みながら、「なぜ生きるのか」ということについての明確な答えを得たような気がした。

親鸞は、死と生の間にある「ひかり」を見つけ、それを「不可思議光」と名づけた。私達には日常で見ることができない光だという。その「ひかり」に出会うと、生への執着が希薄になり、同時に死への恐怖も薄らぎ、安らかな清らかな気持ちとなり、すべてを許す気持ちとなり、思いやりの気持ちがいっぱいとなつて、あらゆるものへの感謝の気持ちがあふれ出る状態となる。こうした状態になった人のことを「菩薩」というそうだ。このような生と死が混ざり合う世界を著者は親鸞の思想から学び、私は、この作品から知ることができた。

また、正岡子規の「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた」の言葉も、心にぐつと来た。永遠の中の瞬間の人生の大切さ、生かされて生きていることの喜び、どんな場合でも平気で生きてゆくことが出来るようになることが仏教のいう「悟り」なのだ。この言葉をいつも心に置いて、この心境に少しでも近付くことが出来るように、私もなりたいたいと思った。

この本に出会わなければ私は、仏教用語を目にする事もなく生活していたかもしれない。しかし今日からは、永遠の中の瞬間の人生がどれほど尊いかと同時に、生かされて生きていることが喜びとなつて、如何なる場合でも平気で生きていける確信を得たような気持ちになった。

この本



納棺夫日記

青木 新門 / 著 桂書房

死者の体を清め棺に納める仕事に就いた著者が、親族や家族の中で孤独を感じながらも、死にゆく人の「ありがと」という言葉に、生の本質を悟つてゆきます。地方の出版社が生んだロングセラーであり、新たに詩と童話を付し定本としています。

『富山で休もう』そんなキャッチコピーを、都会にばらまくのが富山県の現状だ。怖い、こわい。観光は、多少の無茶をしても、遊んで、楽しんだつていいものだと思う。それに、富山には、どこかの温泉街みたいな立派な温泉はあまりない。休むなんて、さみしい。

私は、富山が好きではなくて、好きになるには程遠くて、それでも、嫌になるにはもう少しの、なんて、上手にできた世界だろうと、思う。

山に囲われた私達は、雪国に生まれた。そこは、夏はそれなりに暑く、冬は外が嫌になるくらい、寒い。方言だつてキツイし、それだつて嫌になる。内向的で、積極性に欠ける県民性だなんて、悲しいとも、思う。

けれど、生まれてきたことで、上手に生きて、そうして、笑っている人は、好きだ。そういう風に、笑顔をつまんでいけば、明日も上手に笑えるだろう。

私は、けれど富山にずっといることなんてできない。いつか、都会に出ようと思つていた。そのいつかは、来年の四月。

はじめまして、こんにちは、おはよう、ありがとう、おやすみなさい。また会う日まで。

二度と、帰れないなんて嘘だ。雪山を何度も抜けたことがある。だから、怖くない。

だから、さようなら、また会いましょう。バイバイ。

この本



ほしのふるまち

原 秀則 / 著 小学館

東京の高校での競争に挫折を味わい、水見の高校に転校した少年が、生きるこの本当の意味に気づいていきます。水見の自然、心優しい人々、隣に住む少女との恋や友情の中で、たくましく成長する姿が描かれます。映画化されました。

文芸部門・散文 佳作

『大人になる前に身につけてほしいこと』を読んで
なりたいたい自分になるために

魚津高校一年 上野 愛

私は、大人になどなりたくないと思っていた。理由は、大人になると、何でも自分で責任を取らなければならず、常識を問われ、何かと大変でかた苦しい印象があるからだ。また、年を重ねることに自分らしさをどんどん失っている気もする。大人になると、自分が自分ではなくなるようで、怖い。「大人」とは、「常識」とは何なのか、どんな基準で決まるのか。自分は人からどんな風に見られていて、何のために生きているのか。私は最近特にそんなモヤモヤを抱え、考えこんでしまう。

そんなときこの本に出会った。「大人になる前に身につけてほしいこと」という題を見て、この本ならきつとこのモヤモヤの解決の、ヒントをくれるだろうと思った。ページを開くと、大人になる前に身につけておきたいことが「友だちづき合い」「自立のすすめ」など、六つの観点から書かれていることが分かった。私が特に印象的だった観点は、「友だちづき合い」と「なぜか輝く人」だ。「友だちづき合い」で、私に足りない、できていないと思っただけ、話をよく聞く」ということだ。自己主張が強いと周りから言われる私は、どうしても自分の個人的な興味や、独自の世界についてはばかりを話し、相手のことも考えずにその話題ばかりをしつこく続けがちだ。他人は、自分が思うほどにはその話題に興味がないということも自覚し「話すより聞く」を心がけるだけで、友人関係はよりよいものになるという。

また、いつも同じ人と「群れる」のは素敵ではないともあった。理由は、自分が本当にしたいことや、本当に正しいことを自分でしっかり考えなくなるかららしい。あらゆる交友関係を広げてみてはと勧めがあった。今までの自分は、八方美人と思われぬ不安で、交友関係を広げることが少し恐れていたかもしれない。これからは人と広くつき合い、もつと分け合えていく接していきたい。「なぜか輝く人」では、自分の容貌を気にせず生き生きしている人や、自分を卑下しない人は輝くと綴っていた。うまくいかなことがあるとつい

文芸部門・詩 銀賞

『雲の子供』(大井冷光)を読んで
遊雲

富山北部高校三年 松田 歩実

雲の子供は見ている
立山を すりぬけすりぬけ しずしずと
空のちよつと下から
雲の子供は聞いている
岩を とびこえとびこえ ピンピンと
のんびりとした唄の声
雲の子供は知っている
深く うつむきうつむき しゅしゅと
甘草花がしおれている
雲の子供は追つてゆく
二人が てをとりてをとり ふわふわと
白に消える
雲の子供はきつと
遊びたいのだ
たくましい心と腕の少年と
やさしい心とひとみの少女と

この本



雲の子供(母のお伽噺)ぷりむらの巻
大井 冷光 / 著 ヨウネン社
大正時代の児童文学作家であり、童話口演家であった大井冷光による、立山を題材にした短編童話です。立山登山をめざす少女を少年が手助けする幻想的な風景が印象的な物語です。

「どうせ私は…」と自分の欠点ばかり目について否定してしまいがちだ。また、十代のころは自分の見た目が気になることが多いが、なかなか思い通りにはならないものである。白雪姫の継母の魔女のように、自分が一番美人だと言われたいと気に入らない人は、次々と現れるライバルを常に警戒しなければならぬ。確かに私は「どうせあたしなんかうだし」という発言をしようちゆうするし、「自分なんてキモいだけだろ」と、見た目ばかりを気にかけて苛立っていた。しかし、これでは「輝く人」にはなれないし、腹が立つばかりでひとつもいいことがない。だから、自分を卑下せず自信をもち、常に笑顔を保ちたいようにして、生き生きとしていようと思った。

ここに書いたような「なりたいたい自分」に近づくには、日々試行錯誤をしなければならぬし、続ける意思と努力が必要だと思ふ。性格は簡単には直らない。常に色々な人を観察して、よいと思ふところを見習いたい。私が思う「大人になる前に身につけておきたいこと」は、礼儀と、協調性と、人づき合いだ。礼儀がなつてないと、どこの世界でも通用しないし、社会で生きるためには、どこへいっても人づき合いが必要だと思ふ。それらにプラスして、さっきあったように、人の話を熱心に聞くこと、人と広く付き合うこと、自分に自信をもつこと、見た目や容貌にばかりとらわれないことを心がけていきたい。

大人になりたくない気持ちは変わらない。しかし時の流れをとめることができず、いつかは大人にならなければならない。どうせなるのなら、自分がなつて後悔するような大人にはなりたくない。この本をヒントに、抱いているモヤモヤを解決しつつ、理想の自分に少しずつでも近づいていきたい。そして、人から信頼され、責任感と思ひやりのある立派な大人になろうと思ふ。

文芸部門・詩 銅賞

『螢川』を読んで
memento mori(「死を想え」)

魚津高校一年 芦崎 文音

その光が見えてしまふのが、怖かった
その影が消えてしまふのが、怖かった
信号のように規則的で
まばたきのように不規則で
ばらのように気高くて
桜のように儂くて
それなのに
君は
何も知らないように
命を、燃やす
命が、燃える
螢

この本



大人になる前に身につけてほしいこと
坂東 眞理子 / 著 P.H.P. 研究所
ちよつとした心の持ち方と知恵で、人生が大きく開けます。富山県出身でベストセラー『女性の品格』の著者が、半生をふりかえり、若者たちにすてきな「大人」になつてほしいと願つて綴つたメッセージ集です。

この本



螢川
宮本 輝 / 著 新潮文庫
昭和三十年代の富山県を舞台に、父親の事業がうまくいかない中で、少年の淡い恋の目ざめと人間の成長を描いています。雪国ゆえの豊かな水の描写、春の喜びとともに螢の乱舞する情景は圧巻。芥川賞を受賞した名作です。

『螢川』を読んで

はかなくも美しい生命

魚津高校二年 廣濱 詩緒里

灼灼といつまでも燃え続けそうな光であろうとも

一瞬にして自分の前から消えてしまう

その「死」というものは二時的に深い悲しみを与えるが

それは古い雪の上に新雪が次々とかぶつていくように

月日が経つにつれて、その存在が永遠のものとなる

彼らは星となつて、我らを見ているのか

それともごく身近にいる『螢』となつていくのであろうか

『とべないホタル』に寄せて

富山高校二年 塚原 菜生

みんなと同じ空へ

とべないから

みんなと同じものを

見られないから

いつも下を

見ている

差しのべられた手を

うれしく思ったのは

きつと

とびたい

つて気持ち

心のすみっこに

しがみついていたから

今夜また

小さな月たちが

闇を飾る

今はとべるよ

「とべない」は卒業

この本



とべないホタル

小沢 昭巳 / 著 ハート出版
羽が曲がつとべないホタルが仲間たちに助けられ、新しい光を放つ童話です。作者は、とやまの教員であり、子どもたちに託した願いから生まれた物語は、全国の人々に共感され、感動を呼びました。アニメ化されました。

『地震・地すべり・大崩落 立山カルデラ物語』を読んで

ごてんがいのやま

富山北部高校三年 大坪 理

ごてんがいのやまに

いだかれてねむる子ら

たくさんのおとうさんが

たくさんのおかあさんが

まもってきた ごてんがいのやま

みたことのない おおきなかなしみを生み

子を海へながす ごてんがいのやま

たくさんのおとうさんが

たくさんのおかあさんが

そんな子らを 地につないでいた

とおくながいときのなか

ごてんがいのやまから海へ旅した

たくさんのおとうさんが

たくさんのおかあさんが

わたしたちのあしもとにいる

この本



地震・地すべり・大崩落

立山カルデラ物語

吉友 嘉久子 / 著 ダイナミックセラーズ出版

安政の大地震で6km四方が崩壊地となり、毎年のように洪水を繰り返す「天涯」立山カルデラ。砂防えん堤を再建し、数十年かけて急斜面に大森林を創りあげ、人々の生活を守ってきた男たちの熱き心の物語です。

文芸部門・短歌 銀賞

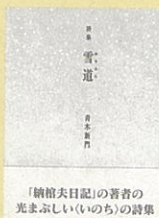
『雪道』より寒椿(青木新門)を読んで
「未来」

富山高校二年 高野 綾香

純白の雪に映えるや寒椿

空見上げれば澄みわたる青

この本



詩集 雪道
青木 新門 / 著 桂書房
当たり前に感じていた雪国の暮らしか、私たちの人生に新しい光をあて、生きる糧を与えてくれる詩集です。何度も朗読して味わってみましょう。平易な言葉にこめられた深い思いと智慧が共感を呼びます。

文芸部門・短歌 佳作

『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』を読んで
「あたりまえ」を大切に

富山いずみ高校二年 西野 琴美

あたりまえ失わないと気付かない

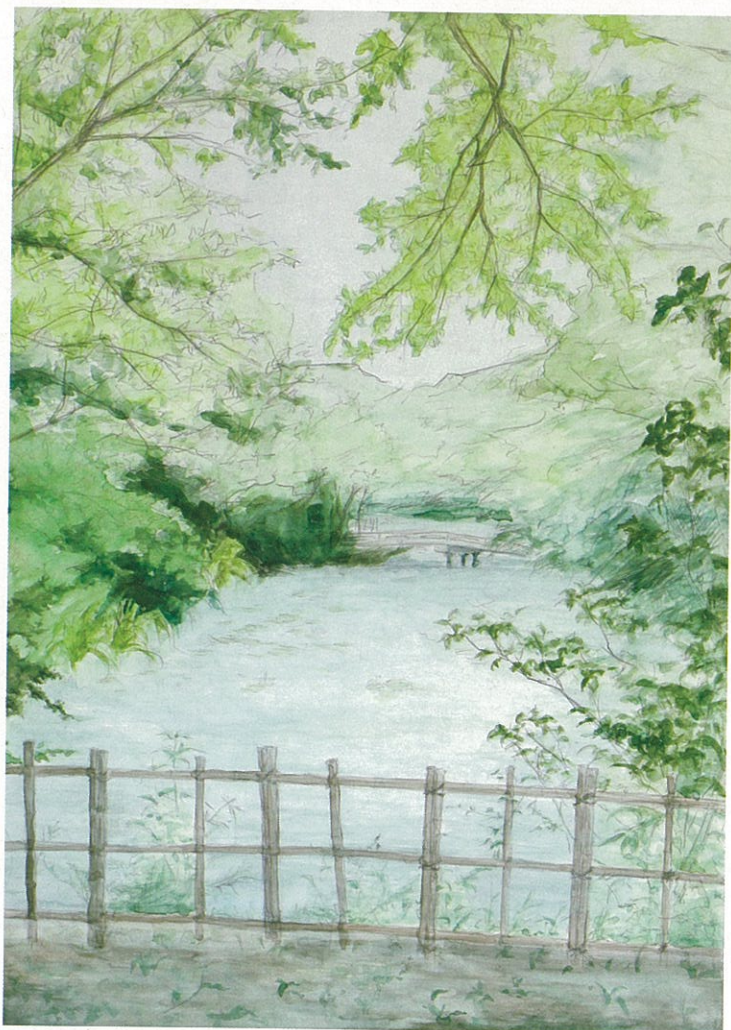
全部奇跡で特別なのに

この本



飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ
井村 和清 / 著 祥伝社
不治の病に冒された砺波市出身の若き医師が、自らの死を目前にして、家族や周囲の人々へ感謝の心を綴った手記です。新装版となり、妻による原稿が加わり、新たな感動を生んでいるロングセラーです。映画化されました。

美術部門



美術部門 金賞
「水鏡」杉原 静良(高岡向陵高校 3年) <百万石太平記>
72.8×51.5

この本

百万石太平記

南原 幹雄 / 著 新潮社
前田利長が、金沢に居座る江戸幕府ゆかりの妻が放った暗殺団から身を守るため、富山城、魚津城、高岡城を転戦しついに瑞龍寺を舞台に命を賭けて争う様が、当時の時代背景とともに描かれます。

文芸部門・俳句 銅賞

『螢川』を読んで
冬

魚津高校二年 澤田 成美

行く人はみな外套を白く染む

文芸部門・俳句 佳作

砺波の風景

砺波野の風がぼうしをうばいけり

砺波市立庄川中学三年 金森 達哉

庄川のせせらぎ静かにこだまして

砺波市立庄川中学三年 小西 ひかる



美術部門 銀賞
「劔岳」中森 翼(富山北部高校 1年) <劔岳 点の記>
38.0×54.0

凡例 部門
題名 / 名前(学校名・学年) ()は原作
サイズ(タテ×ヨコ)cm



美術部門 銅賞
「内川～きらめき～」
津澤 歩実(射水市立新湊南部中学校 3年)
〈万葉集〉
38.0×54.0

この本

越中万葉百科
高岡市万葉歴史館／編
大伴家持らが越中赴任中に詠んだ歌など、「万葉集」の中でも、畿外で最多となる三百三十七首の「越中万葉」とその解説を一冊にまとめました。



美術部門 銅賞
「劔岳」村上 和奈(富山北部高校1年)
〈劔岳 点の記〉
38.0×54.0

この本

風の盆恋歌

互いに心を通わせながらも、離れ離れに二十年の歳月を生きた男女の心の揺らぎを、金沢バリ、八尾を舞台として情豊かに描く恋の物語です。テレビドラマ化されました。

高橋 治／著 新潮社



美術部門 銅賞
「おわら風の盆」
志田 千夏(富山北部高校1年)
〈風の盆恋歌〉
54.0×38.0



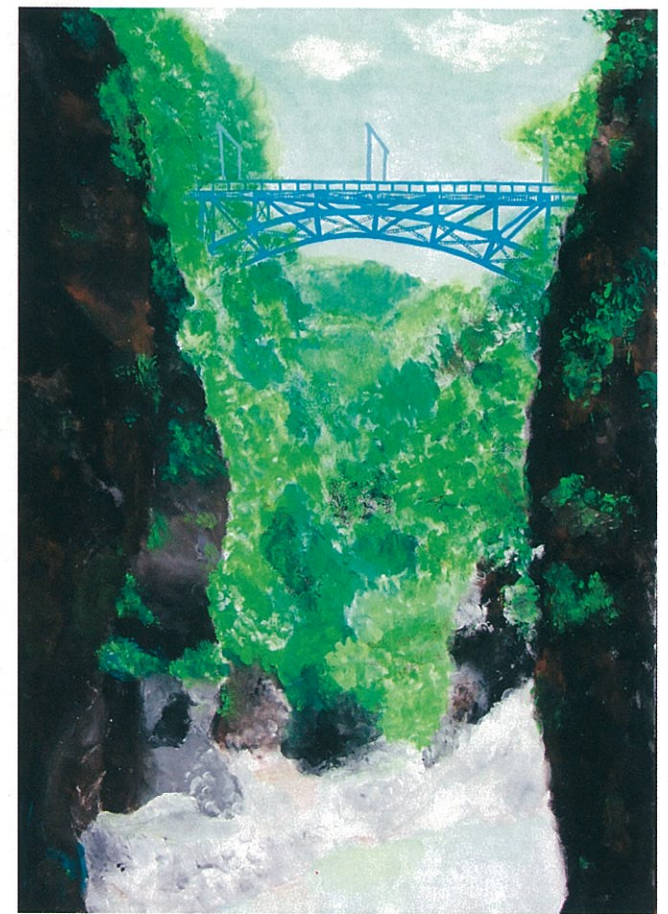
美術部門 銅賞
「美しい劔岳」山森 真実(富山北部高校1年)
〈劔岳 点の記〉
54.0×38.0

この本

うなづき文学散歩

宇奈月を訪れた田中冬二や宮柵一など、とやまゆかりの詩人や幸田露伴、志賀直哉、与謝野晶子、鉄幹など二十人の文学作品を紹介。季節とともに変化する黒部の美しい自然や宇奈月町にかくされたドラマが盛り込まれており、ふるさとを見直すきっかけとなる一冊です。

宇奈月町立図書館



美術部門 銀賞
「黒部の谷」塩岡 亜季(富山北部高校1年) 〈うなづき文学散歩〉
54.0×38.0

この本

旅と生涯学習―旅を楽しみ旅に学ぶ―

前田 正之／著 文芸社
四十年にわたる旅行業務の経験をもつ著者が日本全国を巡り、宿泊した旅館やホテルについての印象を中心に綴った旅の集大成です。富山県では九編が紹介されています。



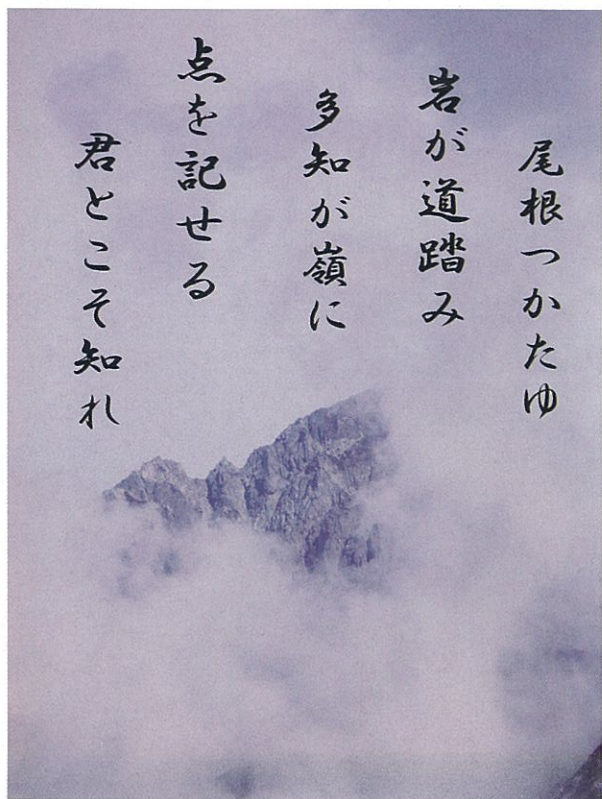
美術部門 銀賞
「散居村」国見 碧(富山北部高校1年) 〈旅と生涯学習―旅を楽しみ旅に学ぶ―〉
51.5×72.8

この本

瑞泉寺と門前町井波
 千秋 謙治 / 著 桂書房
 異国外交文書を勅命によって解読した上人にはじまる瑞泉寺、戦乱の中で土塁の抜け穴を敵に教えてしまったおばあさんの話、松尾芭蕉の最後の門人として、蕉風の完成期とともに築いた青年俳人浪化など、歴史や伝説が生き生きとよみがえります。



写真部門 金賞
 「おめん3兄弟」金子 有純(高岡第一高校 2年) <瑞泉寺と門前町井波>
 25.4×36.8

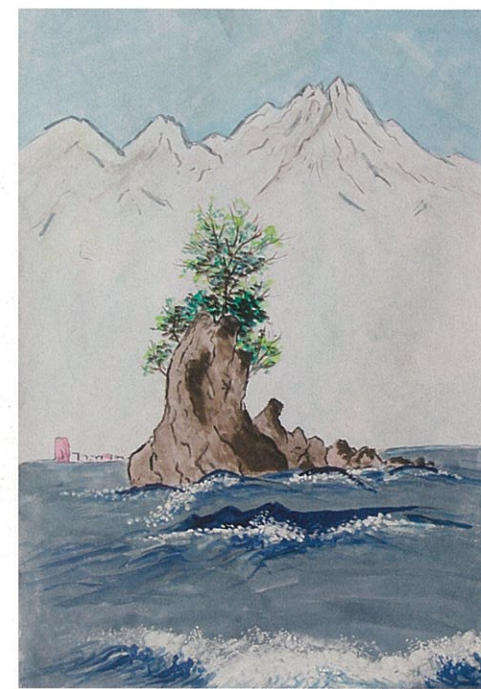


写真部門 銀賞
 「点の記に寄す」有馬 秀和(富山高校 3年)
 <劔岳 点の記>
 30.5×20.3

写真部門



美術部門 佳作
 「劔岳」田中 風砂(富山北部高校 1年) <劔岳 点の記>
 38.0×54.0



美術部門 銅賞
 「波に打たれる雨晴海岸」
 圓佛 菜々美(富山市立和合中学校 2年)
 <万葉集>
 54.0×38.0



美術部門 佳作
 「日本海の恵み」松原 紗瑛(滑川高校 1年)
 <劔岳 点の記>
 38.0×54.0



美術部門 佳作
 「立山連峰」石野 叶子(富山北部高校 1年)
 <劔岳 点の記>
 38.0×54.0


凡例 部門
 題名/名前(学校名・学年) ()は原作
 サイズ(タテ×ヨコ)cm



写真部門 銅賞
 「大自然の中で」畑 まりな(伏木高校 1年)
 (万葉集)
 25.4×36.8



写真部門 銅賞
 「廃墟」柴野 智子(高岡第一高校 1年)
 (無告の記)
 36.8×25.4

この本 

無告の記
 岩倉 政治 / 著 新興出版社
 南砺の農村に生まれた主人公は、明治から昭和の激動の時代を背景に、奉公や進学、就職や兵役、恋を経て生きる道を模索し、家族の絆や風土への思いを深めます。多彩な登場人物を通して、当時の人々の目から歴史を知ることができる自伝的長編小説です。




写真部門 銅賞
 「偉人の顔」鶴見 昇乃信(南砺福野高校 1年)
 (瑞泉寺と門前町井波)
 36.8×25.4



写真部門 銅賞
 「夏の空」松井 優花(南砺福野高校 1年)
 (とやま博物館・文化施設を詠む)
 20.3×30.5



写真部門 銀賞
 「私のふるさと井波町」柴田 早理(南砺総合福野高校 2年)
 (瑞泉寺と門前町井波)
 25.4×36.8

この本 

とやま博物館・文化施設を詠む
 富山県歌人連盟
 とやまの博物館での見聞などが短歌で表現されることで、その場での心の揺れや感動、生き生きとした臨場感が溢れる異色の紹介となります。これらの作品にふれ、実際に訪れて自感性を確かめてみてほしいものです。



写真部門 銀賞
 「王」南部 真子(南砺福野高校 1年) (とやま博物館・文化施設を詠む)
 20.3×30.5



写真部門 銅賞
 「太子伝会の日」大瀧 友紀(高岡第一高校 1年)
 (瑞泉寺と門前町井波)
 25.4×36.8

「ふるさと文学情景作品」コンクール審査委員会 委員名簿

| 委員名 | 役職等 |
|--------|--|
| 立野 幸雄 | 富山県立図書館長 |
| 柳原 正樹 | 富山県水墨美術館長 |
| 橋本 文良 | 高岡市美術館副館長(学芸課長) |
| 中井 精一 | 富山大学人文学部准教授 |
| 白江 日呂雄 | 県中学校文化連盟 新聞・文芸専門部 代表 (高岡市立伏木中学校教頭) |
| 広井 優子 | 県中学校文化連盟 美術専門部 代表 (富山市立大沢野中学校教頭) |
| 寺田 允美 | 県高等学校文化連盟 文芸専門部会 (富山国際大学付属高等学校教諭) |
| 高畑 信雄 | 県高等学校文化連盟 美術・工芸専門部会 (志賀野高等学校教頭 高文連参与) |
| 梅木 宏真 | 県高等学校文化連盟 写真専門部会 (高岡第一高等学校教諭) |
| 朝倉 隆文 | 文化振興課長 (富山県ふるさと文学館(仮称)建設担当) |
| 木下 晶 | 生涯学習・文化財室長 (全国高等学校総合文化祭富山県実行委員会事務局長) |

応募状況

応募総数 1,028点(文芸946点、美術46点、写真36点)

| 部門 | 文芸 | | | | | 美術 | | | 写真 | | | 総計 | |
|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|----|-----|-----|-----|----|-------|
| | 校種 | 散文 | 詩 | 短歌 | 俳句 | 部門計 | デザイン | 絵画 | 部門計 | 単写真 | 組写真 | | 部門計 |
| 応募数 | 高等学校 | 186 | 249 | 188 | 283 | 906 | 4 | 35 | 39 | 31 | 4 | 35 | 980 |
| | 中学校 | | | 20 | 20 | 40 | | 7 | 7 | 1 | | 1 | 48 |
| | 総計 | 186 | 249 | 208 | 303 | 946 | 4 | 42 | 46 | 32 | 4 | 36 | 1,028 |

| 入選 | 金賞 | 1 | | | | 1 | | 1 | 1 | 1 | | 1 | 3 |
|----|----|---|---|---|------|-------|--|-------|-------|---|---|---|-------|
| | 銀賞 | 1 | 1 | 1 | | 3 | | 3 | 3 | 2 | 1 | 3 | 9 |
| | 銅賞 | 3 | 1 | | 1 | 5 | | 5(2) | 5(2) | 4 | 1 | 5 | 15(2) |
| | 佳作 | 1 | 3 | 1 | 2(2) | 7(2) | | 3 | 3 | | | | 10(2) |
| | 総計 | 6 | 5 | 2 | 3(2) | 16(2) | | 12(2) | 12(2) | 7 | 2 | 9 | 37(4) |

()は中学生で内数

「ふるさと文学情景作品」コンクール入選作品

●文芸部門

| | 題名 | 分野 | 高校 | 名前 | 原作 |
|----|----------------|----|-------------|--------|----------------------|
| 金賞 | 『キトキトの魚』を読んで | 散文 | 魚津高校1年 | 上浦 眸 | キトキトの魚 |
| | 劔岳<点の記>を読んで | 散文 | 魚津高校1年 | 大川 和晃 | 劔岳<点の記> |
| 銀賞 | 遊雲(あそびぐも) | 詩 | 富山北部高校3年 | 松田 歩実 | 雲の子供 |
| | 未来 | 短歌 | 富山高校1年 | 高野 綾香 | 『雪道』より寒椿 |
| 銅賞 | 『ダモイ遙かに』を読んで | 散文 | 魚津高校1年 | 高倉 周一郎 | ダモイ遙かに |
| | 『納棺夫日記』を読んで | 散文 | 魚津高校1年 | 寺西 恵里佳 | 納棺夫日記 |
| | memento mori | 詩 | 魚津高校1年 | 芦崎 文音 | 螢川 |
| | 冬 | 俳句 | 魚津高校2年 | 澤田 成美 | 螢川 |
| | おはよう、バイバイ。また明日 | 散文 | 富山北部高校3年 | 宮坂 星夏 | ほしのふるまち |
| 佳作 | なりたい自分になるために | 散文 | 魚津高校1年 | 上野 愛 | 大人になる前に身につけてほしいこと |
| | はかなくも美しい生命 | 詩 | 魚津高校2年 | 廣濱 詩緒里 | 螢川 |
| | ごてんがいのやま | 詩 | 富山北部高校3年 | 大坪 理 | 地震・地すべり・大崩落・立山カルデラ物語 |
| | 『とべないホテル』に寄せて | 詩 | 富山高校1年 | 塚原 菜生 | とべないホテル |
| | “あたりまえ”を大切に | 短歌 | 富山いづみ高校2年 | 西野 琴美 | 飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ |
| | 砺波の風景 | 俳句 | 砺波市立庄川中学校3年 | 金森 達哉 | |
| | 砺波の風景 | 俳句 | 砺波市立庄川中学校3年 | 小西 ひかる | |

●美術部門

| | 題名 | 分野 | 高校 | 名前 | 原作 |
|----|------------|----|--------------|--------|------------------|
| 金賞 | 水鏡 | 絵画 | 高岡向陵高校3年 | 杉原 静良 | 百万石太平記 |
| 銀賞 | 劔岳 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 中森 翼 | 劔岳<点の記> |
| | 黒部の谷 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 塩岡 亜季 | うなづき文学散歩 |
| | 散居村 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 国見 碧 | 旅と生涯学習―旅を楽しむ旅に学ぶ |
| 銅賞 | おわら風の盆 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 志田 千夏 | 風の盆恋歌 |
| | 劔岳 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 村上 和奈 | 劔岳<点の記> |
| | 内川～きらめき～ | 絵画 | 射水市立新湊南中学校3年 | 津澤 歩実 | 万葉集 |
| | 美しい劔岳 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 山森 真実 | 劔岳<点の記> |
| | 波に打たれる雨晴海岸 | 絵画 | 富山市立立合中学校2年 | 圓佛 菜々美 | 万葉集 |
| 佳作 | 立山連峰 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 石野 叶子 | 劔岳<点の記> |
| | 劔岳 | 絵画 | 富山北部高校1年 | 田中 凧砂 | 劔岳<点の記> |
| | 日本海の恵み | 絵画 | 滑川高校1年 | 松原 紗瑛 | 劔岳<点の記> |

●写真部門

| | 題名 | 分野 | 高校 | 名前 | 原作 |
|----|-----------|-----|------------|--------|-----------------|
| 金賞 | おめん3兄弟 | 単写真 | 高岡第一高校2年 | 金子 有純 | 瑞泉寺と門前町井波 |
| 銀賞 | 点の記に寄す | 単写真 | 富山高校3年 | 有馬 秀和 | 劔岳<点の記> |
| | 私のふるさと井波町 | 単写真 | 南砺総合福野高校2年 | 柴田 早理 | 瑞泉寺と門前町井波 |
| 銅賞 | 王 | 組写真 | 南砺福野高校1年 | 南部 真子 | とやまの博物館・文化施設を詠む |
| | 太子伝会の日 | 単写真 | 高岡第一高校1年 | 大瀧 友紀 | 瑞泉寺と門前町井波 |
| | 廃墟 | 単写真 | 高岡第一高校1年 | 柴野 智子 | 無告の記 |
| | 夏の空 | 組写真 | 南砺福野高校1年 | 松井 優花 | とやまの博物館・文化施設を詠む |
| | 大自然の中で | 単写真 | 伏木高校1年 | 畑 まりな | 万葉集 |
| | 偉人の顔 | 単写真 | 南砺福野高校1年 | 鶴見 昇乃信 | 瑞泉寺と門前町井波 |

第36回全国高等学校総合文化祭

創造の舞台～美し越の国～

人と文化の輝く「元気とやま」を創造の舞台として、次代を担う高校生の交流の輪が広がり、質の高い新しい文化を生み出し、未来へ羽ばたき、全国、そして世界に発信する文化の祭典を開催します。

平成24年8月8日(水)～8月12日(日)
富山県内15市町村で開催

8月8日(水) ●総合開会式…富山市芸術文化ホール
●パレード……富山市街地



- 新しい文化の創造
- 未来への飛翔
- 「元気とやま」の発信

| 開催部門 | 主会場 | 所在地 | 日程(平成24年8月) | | | | |
|-----------------------|---------------------------|------|-------------|-------|--------|--------|--------|
| | | | 8日(水) | 9日(木) | 10日(金) | 11日(土) | 12日(日) |
| 演劇 | 富山県民会館 | 富山市 | | | ○ | ○ | ○ |
| 合唱 | 高岡市民会館 | 高岡市 | | | | | ○ |
| 吹奏楽 | 新川文化ホール | 魚津市 | | ○ | ○ | | |
| 器楽・管弦楽 | 富山市芸術文化ホール [オーバード・ホール] | 富山市 | | | ○ | ○ | |
| 日本音楽 | 高周波文化ホール [新湊中央文化会館] | 射水市 | | | | ○ | ○ |
| 吟詠剣詩舞 | 北アルプス文化センター | 上市町 | | | | | ○ |
| 郷土芸能 | 砺波市文化会館 | 砺波市 | | | ○ | ○ | ○ |
| マーチングバンド・ パトントワリング | 氷見市ふれあいスポーツセンター | 氷見市 | | | ○ | | |
| 美術・工芸 | 富山県民会館 | 富山市 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 書道 | 魚津テクノスポーツドーム [ありそドーム] | 魚津市 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 写真 | 福野文化創造センター[ヘリオス] 五箇山 | 南砺市 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 放送 | 富山国際会議場 | 富山市 | | | | ○ | ○ |
| 囲碁 | 朝日町文化体育センター [サンリーナ] | 朝日町 | ○ | ○ | | | |
| 将棋 | クロスランドおやべ | 小矢部市 | ○ | ○ | | | |
| 弁論 | 舟橋会館 | 舟橋村 | ○ | ○ | | | |
| 小倉百人一首かるた | 黒部市総合体育センター | 黒部市 | | ○ | ○ | ○ | |
| 新聞 | ウイング・ウイング高岡 | 高岡市 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 文芸 | 宇奈月国際会館[セレネ] | 黒部市 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 高岡市万葉歴史館(文学散歩) | 高岡市 | ○ | | | | |
| | 立山博物館(文学散歩) | 立山町 | ○ | | | | |
| | 富山県ふるさと文学館(仮称) | 富山市 | ○ | | | | |
| 自然科学 | 入善町民会館[コスモホール] | 入善町 | | | ○ | ○ | ○ |
| | 立山青少年自然の家 | 立山町 | | | | ○ | ○ |
| (協賛)ボランティア | 滑川市民交流プラザ | 滑川市 | | ○ | ○ | | |
| (協賛)特別支援学校 | 富山県民共生センター[サンフォルテ] | 富山市 | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| (協賛)定時制通信制 | ウイング・ウイング高岡 | 高岡市 | | | | ○ | ○ |
| (協賛)茶道 | 国宝瑞龍寺 | 高岡市 | | ○ | ○ | | |



8月 宮崎大会 パレード



8月 宮崎大会 郷土芸能部門



11月 県高文祭で生徒実行委員がPR

詳しくはホームページで [全国高総文祭とやま2012](#) [検索](#)

「ふるさと文学情景作品」コンクール入選作品展示



第10回新川キャンパスフェスティバル

平成22年10月30日(土)
県民カレッジ新川地区センター、新川みどり野高校



第15回富山県中学校文化祭

平成22年10月10日(日)
新川文化ホール



第7回県民カレッジ 高岡地区センター学遊祭

平成22年11月5日(金)～7日(日)
県民カレッジ高岡地区センター、志貴野高校



第10回となみキャンパスフェスティバル

平成22年11月6日(土)～7日(日)
県民カレッジ新川地区センター、となみ野高校



第22回富山県高等学校文化祭

平成22年11月13日(土)～15日(月)
富山県民会館 ギャラリーA

